

臨地実習参加前後における職業意識の変化について

礒永 美奈 (G160002)

指導教員：佐藤 祐造

キーワード：管理栄養士、臨地実習、職業意識、

はじめに

「管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム 2015」の提案¹⁾では、想定した管理栄養士像を「人間の健康の維持・増進、疾病の発症予防・重症化予防、および生活の質の向上を目指して、望ましい栄養状態・食生活の実現に向けての支援と活動を、栄養学・健康科学の等関連する諸科学をふまえて実践できる専門職」としている。また、社会に暮らすすべての人々、すなわち子どもから高齢者、健康人および病者や障がい者を対象として、その個人や集団の健康・栄養・食生活の課題を評価し、栄養診断し、関連職種や関連機関と連携・協働して、教育および環境の両面から効果的な支援や活動を計画・立案・実施し、モニタリング・評価（判定）する力が求められていると記されている。

平成 14 年 4 月に施行された栄養士法²⁾では、「近年、がん、脳卒中、心臓病、糖尿病等の生活習慣病が国民の健康面における大きな課題となっており、これらの疾病の発症と進行を防ぐには、生活習慣の改善、なかでも食生活の改善が重要な課題となっている。こうした中で、栄養指導の分野においては個人の身体状態や栄養状態等を総合的・継続的に判断し指導する栄養評価・判定の手法の普及が急がれており、特に傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導に際して、栄養評価・判定に基づく適切な指導を行うための高度な専門知識・技能が必要であることから、こうした業務に対応できる管理栄養士を育成するための所要の法律改正を行うものである。」とある。その中で、「臨地実習」の教育目標は「実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識および技能を習得させる。」とあり³⁾、「臨地実習」は、管理栄養士養成課程における実践教育科目として重要な位置づけとなっている。

目的

本研究では、管理栄養士養成課程に在籍する学生を対象に、臨地実習前後における管理栄養士の職業意識の変化をみるとともに、臨地実習前後のコンピテンシー到達度の評価を行った。また、実際に体験した実習内容の理解度をアンケート調査から、分析・検討することで、今後の教育内容を充実させることを目的とした。

方法

1. 調査対象者

管理栄養士養成課程に在籍し、同意の得られた調査年度に初めて臨地実習に参加する 3 年生 69 名を対象とした。

2. 調査期間・方法

臨地実習参加前（平成 29 年 8 月末～11 月初旬）と参加後（平成 29 年度 10 月末～平成 30 年度 3 月初旬）の 2 回、自記式質問用紙調査を行った。アンケートはその場で回答、回収を行った。

3. 解析方法

解析には、統計ソフト IBM SPSS Statistics Ver.25、Excel を用い、有意水準は 5%（両側検定）とした。

意識調査は、度数分布にて示した。「現在目指している管理栄養士像について」の設問は、クロス集計を行い、 χ^2 検定を行った。

各コンピテンシー項目、理解度は、1～5 点に点数化し、平均値（標準偏差）で示した。点数の高い順に順位付けを行った。コンピテンシー項目の比較には、Wilcoxon 符号付順位検定を用いた。

4. 倫理的配慮

調査の意義・目的、調査に回答しないことによる不利益は生じないことを説明し、同意を得られた者にアンケートを実施した。なお、至学館大学倫理委員会の承認を得て、実施した。（受付番号：95）

結果

調査対象者のうち、69 名（回収率 100%）から回答が得られた。臨地実習前後の比較するため、前後のデータが得られた 64 名（有効回答率 92.7%）を解析対象者とした。

1. 実習に関する意識調査

臨地実習に参加するにあたり、「興味はあるが、不安である」と答えた人が最も多く、その理由として、「実際に現場が見られるので、楽しみである」が最も多かった。臨地実習参加後に臨地実習に参加して意義があったかと問う設問では、「とても有意義であった」、「有意義であった」と 63 名（98.4%）が回答している。

現在目指している管理栄養士像についての設問では、臨地実習参加前は「病院で働く」18 名（28.1%）が最も多く、臨地実習参加後は 29 名（45.5%）へと有意に増加した。臨地実習参加前後でクロス集計を行い、 χ^2 検定を行った結果、3 項目を除き有意差が認められた。

2. 臨地実習参加前後のコンピテンシー到達度の比較

臨地参加後のコンピテンシー到達度は 27 項目すべて、平均点数が 3 点以上であった。また、臨地実習参加後の平均点数は、臨地実習参加前よりすべての項目において高値であった。

基本コンピテンシーは、「管理栄養士という職業に就くことを誇りに思いますか」の自己確信の質問で有意差が認められた。共通コンピテンシーは、18 項目のうち、12 項目において有意差が認められた。職域別コンピテンシーは、4 項目すべてにおいて有意差が認められた。

3. 実習体験の有無と体験した実習内容の理解度

病院実習で体験が多かった項目は、「外来・入院患者を対象とした栄養指導についての理解が出来たか」、「医療スタッフの一員として、患者への関わり方（対応やマナー等）について学ぶ」、「入院患者に対する個別対応（栄養・食事面から）について学ぶ」、「病院における栄養部門の位置づけと具体的取組について学ぶ」の 4 項目であった。「栄養アセスメントから栄養ケアプランの立案の方法について学ぶ」の項目は実習体験者も少なく、そのうちの理解度も低い項目であった。

福祉施設実習では、「個別支援計画の総合的なマネジメントの考え方について学ぶ」の項目で「全く理解していない」という回答があった。

事業所実習では、体験した実習内容の理解度として「理解していない」、「全く理解していない」の回答さ

れた項目はなかった。

考察

1. 実習に関する意識調査

臨地実習参加後の調査で臨地実習がほぼ全員が有意義であったと回答しており、その理由として多かった「具体的な方法を知ることが出来た」を挙げている。つまり大学の講義では得られない実践的、専門的な内容を臨地実習で修得することが出来たためであると考えられる。管理栄養士像についても回答総数が増えていることなどから、臨地実習を通して職業意識の向上が図られたと考えられる。

2. 臨地実習参加前後のコンピテンシー到達度の比較

基本コンピテンシー項目は、「管理栄養士という職業に就くことを誇りに思いますか」の項目のみ、有意差が認められた。これは、管理栄養士の職業に対する高い価値を示す項目であり、実際に管理栄養士の仕事の内容を間近で見ることによって、意義のある仕事であると感じたのではないかと考えられる。

共通コンピテンシーおよび職域別コンピテンシーについては、倫理的配慮やコミュニケーション、衛生管理、さらに食事摂取基準や食品成分表に関する項目は順位が高く、高い到達度が示唆された。一方、アセスメントや検査値に関する専門的内容の項目は順位が低く、到達度は低いと考えられた。このことから、より専門的な能力の教育には課題が残されていると言える。

3. 実習体験の有無と体験した実習内容の理解度

大学の講義や演習・実習で概念として学んだことが、実際に実習の場で具体化されることで、理解が深まったのではないかという結果になった。学生が臨地実習で何を学び、何を理解したのかを把握し、今後に活かしていく必要があると考えられた。

本研究の結果、管理栄養士養成課程の学生にとって、臨地実習という体験学習は、講義や演習・実習で学んだことを実際に体験することにより、職業意識や学習内容の理解度及び修得度が高まることが示唆された。

参考文献

- 1) 厚生労働省（2013）「健康日本 21（第二次）」、（2018-12-07 参照）
- 2) 特定非営利活動法人 日本栄養改善学会理事会（2015）「管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム 2015」の提案、（2018-12-07 参照）
- 3) 厚生労働省（2002）栄養士法施行規則（2018-12-07 参照）